

けば、○下略

〔榮花物語浦五の別〕さてかへり給て、うへ定藤原は、みや子の御有様のかはらせ給へるに、又いとゞしき涙さくりもよゝなり、

〔宇治拾遺物語〕これも今はむかし、る中のちごのひえの山へのぼりたりけるが、中我で、の作たる麥の花ちりて、實のいらざらんおもふが、わびしきといひて、さくりあげてよゝとなきければ、うたてしやな、

〔名物六帖人事四〕性行笑啼、鯁涕、續字彙、鯁與哽、通、鯁咽、悲塞也、

〔萬葉集四〕相聞、紀女郎怨恨歌三首中

白妙乃袖可別、日乎近見、心爾咽飲、哭耳四所流、

〔萬葉集二十〕爲防人情陳思作歌一首、并短歌中

若草乃都麻波等里都吉、平久和禮波伊波波牟好去而、早還來等麻蘇泥毛知、奈美多乎能其比牟世比都都、言語須禮婆、略下

〔書言字考節用集九〕言辭、泣血毛、

〔倭訓栞和編二十九〕わとなく、

〔鳩巢小説下〕一赤穂義士仇討ノ時、中又一人額ノ疵ヲ見ヨト申音イタシ、暫アリテ、大勢ノ聲ニテワツト泣申聲仕候、是ハ上野介吉良ドノ、シルシヲ揚候テ、悦ビ泣ト聞ヘ申候、

〔大鏡八〕參河入道殿の入唐のむまのはなむけのかうし、清昭法橋のせられし日こそまかりたりしか、略中そこばくあつまりたりし万人、さそこそなきて侍りしか、それは道理の事也、

〔書言字考節用集九〕言辭、淫々指南、下貌、雨々、盛衰、

〔倭訓栞前編〕十、さめく、更級日記に見ゆ、神代直指抄に、さめく、と泣といふは、啼澤女命より